

月報	日本キリスト改革派 横浜中央教会	2016年5月8日 5月号
----	---------------------	------------------

「キリストの高挙」について（ウエストミンスター大教理問答問53より）

K. T

大教理問答の51問「キリストの高い状態とは何か？」の答えとして、「キリストが高く挙げられる」が示す、キリストの「高い状態」を言い表すワードは、4つありました。

①「復活」②「昇天」③「御父の右に座している」④「さばきのための再臨」です。今回はこのうちの②について解説します。問の答えを参照してください。

問53「キリストはその昇天において、どのように高くされたか。」

キリストが復活された後、天にのぼるまでの日数は40日でした。その間に繰り返し弟子たちに現れ、重大な命令を与えました。「だから、あなた方は行って、全ての民をわたしの弟子にしてください。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなた方に命じていたことを全て守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」（マタイ28、19～20）全ての民に福音を述べ伝えるという使命を課しました。

「人間性において、私たちの首として、敵に打ち勝って、可見的に最高の天にのぼられた。」の「人間性において」という意味は、キリストが昇天されたのは神としてのみでなく、人間の肉体と靈魂を備えた人間としてでもあったということです。

また、「わたしたちの首（かしら）として」とは、私たち罪びとの代表として行動しておられるということを意味します。「可見的に最高の天に昇られた」とは、使徒言行録1.9～11にわかりやすく記されています。「イエスは彼らが見ているうちに天に上げられたが、雲に覆われて彼らの目から見えなくなった。イエスが離れ去って行かれる時、彼らは天を見つめていた。・・・」これは、幻覚や幻などではなく、実際に起こったことであり、弟子たちが目撃したことを事実として述べている部分です。

次に「そこで人々のために賜物を受け、そこへ私たちの心をひき上げ、」の「人々のために賜物を受け」という言葉はエフェソ4、8～12を見ますと、キリストが昇天したのは、「教会における様々な働きの中に私たちを用いるために、いろいろな役職を設け奉仕の技に適した者とさせ、教会というキリストの体を作り上げていく」という大きな意味があります。そして、「信仰と教理の学びによって私たちの心は一つになり、成熟し・・・頭であるキリストに向かって成長していきます。」とあります。さらに、救い主が天にいてことによって、私たちの心を天に向けさせ、地上のこの世の物に心を奪われず、更に増して天の国を仰ぎ見ることができるようになっているというわけです。そして、天におられる間じゅう、再臨の日までずっとキリストは信じる者のために、永遠の住まいを準備しておられるというのです。

私たちはその天がどこにあるかを知ることはできませんが、それは空想の世界のことでなく、確実に一つの場所を表し、復活のイエスキリストがそこにおられるという事実を、私たちが確信し信じることを要求しているものであります。会堂増築が始まった今この時期、私たち一人一人に与えられた働きに感謝して、心一つにキリストの体である教会をたて上げていきたいものです。

賛美歌を口ずさむ時

N. K

賛美が頭に浮かび、口ずさむことができるのは、他のことに心を奪われないから幸いです。うまくいかなくて心がしぼむ時も、逆に思い上がりそうになる時も、賛美の歌詞に心を合わせると、自然に静かな思いに導かれることが多いのです。昔、私を導いてくださった方は、学校の廊下を歩きながら大きな声で賛美していました。私も時々（小さな声で）歌っています。

聖歌も賛美歌もワーシップソングも好きですが、賛美歌では「テヒリーム33」というアルバムに収められた曲がよく頭に浮かびます。これは、私が高校時代から好きだった久保田早紀さんがクリスチャンとして初めて出したアルバムで、イエス様はどのような方か、私に何をしてくださったか、なんと幸いだろう、なんと素晴らしい方だろう、さあほめたたえようと、イエス様に心を向ける11曲の賛美歌が収められています。緩やかなテンポで古文めいた歌詞が多いのですが、ただ歌い流してしまうのではなく、意味を考えながら賛美するにはかえって良いように思います。（ミッション系の学校なら古文の学習にぴったりです。）

主よ、主の愛をば - 讚美歌 342 番 -

主よ、主の愛をば	いかにほめまつらん	誉に宝に	つゆ動かされず
歌うとすれども	言の葉知らぬ身	思いも言葉も	我が主に倣いて
天なる御歌を	我が口に給え	心に愛のみ	宿さしめたまえ

いともかしこし - 讚美歌 502 番 -

いとも畏しイエスの恵み 罪に死にたる身をも活かす
主より賜る天の糧に 飢えし心も飽き足らいぬ
世にある限り 君の栄えと慈しみとを語り伝えん
救いの恵み告ぐる我は 楽しみあふれ歌とぞなる
滅びを出でしこの喜び あまねく人に得させまほし
世にある限り 君の栄えと慈しみとを語り伝えん

4月14日と16日に熊本で起きた地震には本当にびっくりして心配しました。熊本市内に母と弟が住んでいるからです、14日の地震の後に電話した時は「大丈夫。心配ない」ということでした。しかし16日の本震はとても大きくゆれたようで、本棚が倒れたり食器が落ちたりしたそうです。家の内壁や外壁にはひびが入りました。この後も余震が続き古い一軒家で耐震工事もしていないので、軽トラでの避難生活が始まりました。

福岡に住む妹夫婦が、17日に高速道路が寸断されていて一般道が大渋滞の中を高齢の母を迎えに行ってくれました。その前日の16日には、母と同じ宗派の福岡の教会の方が熊本の教会員へ救援物資を届けてくれました。母は家にいなかったの、わざわざ妹に「お母さんはどこに避難しているの?」と問い合わせて、母が避難していた帯出中学校の運動場の軽トラを捜して届けてくれました。母が福岡へ避難し後も、教会には関係のない弟へ何度か食品を届けてくれたそうです。大変な災害が起きた時のクリスチャンの行動の早さと親切に妹も私もとても感謝しました。

4月17日に横浜中央教会の礼拝の後、熊本伝道所の地震被害状況を書いたものを読んで、またびっくりしました。今まで改革派の教会が熊本にあることも知らなかったし、またその場所が実家と同じ校区ですぐ近くだったのです。家の様子が心配だったのと母も福岡から5月7日に戻ってきたので10日から13日まで帰省しました。その時に熊本伝道所にも伺い、西堀先生ご夫妻とお話することもできました。

現地支援ニュースの中に『4月20日に熊本市の「耐震検査」の担当者が来て下さり、教会を目視で検査して下さいました結果、倒壊の危険性は低いとの判断がくだされました』と書いてあります。私は20日に教会に検査が入ったのなら、実家は近所だからもうすぐ検査に来てくれるだろうと思っていましたが、熊本市に依頼をしないと来ないのです。

西堀先生は熊本市のHPで建築指導課の応急危険度判定の告知を見て、すぐに依頼をされたので早く来てくれたのです。教会を救援物資の受け渡し場所にできなかったのも、教会の安全性を確認の必要があったそうです。

私はそのことに気がついて、建築指導課に電話をしたときは、ずっと話し中でつながりませんでした。また応急危険度判定は大地震により被災した建物を調査して、その後の余震などによる倒壊の危険性を判定するもので、住めるかどうか（構造的に安全か、改修は必要かなど）を確認するものではないことも後でわかりました。実家が安全かどうかを早く知りたいけれど、知り合いの大工さんもないしと思っていたところ、熊本市のコールセンターの方が『住宅補修専用・住まいダイヤル』の電話番号を教えてくださいました。そこに電話してもずっと話し中です。何日も電話してやっとつながり実家の住所々連絡先を伝えてちょっと安心しました。

その日からもう10日ほど経ちますが、まだ調査の連絡はないので、たくさんの依頼が殺到しているのだと思います。非常時には情報を集めて早く行動した方がいいのだと実感しました。またこのような情報が集めにくい高齢者の方々へ教えてあげることも大切だと思いました。

熊本伝道所には山中恵一先生が派遣されていました。立石彰先生と同級生だそうです。西堀先生は帯山西小学校に避難されていた時に知り合った方々を訪問されていました。

教会は国際飢餓対策機構からの救援物資がたくさん届いていました。必要な方に差し上げているそうです。また日々必要なものが変わってくるので、要望のあるものは購入しているそうです。近所の20代の若者数名が「ボランティアさせてください」と教会に出入りするようになったそうです。説教壇上の天井は抜け落ちたままになっていましたが、もう一度調査した後に補修する予定だそうです。

私は熊本に帰った時、日曜日には大津教会で礼拝を守っていました。大津教会の教会員で西原村の方は家が倒壊して避難所生活だそうです。南阿蘇村の方は2回目の本震の時に起きた土石流から命からがら逃げることができたけれど、家はつぶれてしまいすべてを失ったそうです。避難所はつらいということで、大津教会でお世話になっているそうです。私の家族は自宅で生活できているだけでも、恵まれているのだと思います。余震が収まって、被災者の方々が今までの普通の生活を早く取り戻すことができますようにとお祈りいたします。